

石川啄木の教育観とその実践について

桂 孝 二

はじめに

私は石川啄木が、今日認められている啄木をきずきあげた最初は、彼のかぞえ年21~22才の濫民尋常高等小学校代用教員をつとめた1年余の時期であったと考えている。

上田庄三郎氏はその期の啄木を「青年教師啄木」と捉え、日本の自由教育の先駆者、「山びこ学校」の祖、生活教育の先駆者と見、教科を教えるのが目的でなく、教科書以外の人間教育、今日で言えば、特別教育活動に主力をそそぐ教育を行なった教師という見方をされている。(岩波版啄木全集付巻「啄木案内」および筑摩版啄木全集第8巻所載「青年教師としての啄木」)。碓田のぼる氏も、この期の啄木の教育活動を、国民教育運動や集団主義教育の源流と見ていられる。もつとも氏は、啄木全体の中でこの期の啄木を見ようという態度をも示していられるが……。 (『石川啄木』昭48.3東邦出版社刊)

私は本稿に於て啄木の成長の中での教師時代として本稿をまとめたと思っている。この1年余の代用教員の時期に、啄木はそれまでに学び、考えたすべてを包括して生徒に接し、教育観、社会観、人間観をまとめていると考え、それがその後の啄木を生み出していると考えるのである。啄木がその本領を発揮した最初はこの代用教員時代であると考え、それを彼のロマン主義時代の最後と見ている。それ故に後年の啄木と比較する時、未熟な点も見られるであろうと考えている。

なお、本稿では、啄木の文章のかなづかいを古文体のものを除き、すべて現代かなづかいに改め、かつ、漢字の使い方も今日の使い方によってかなとする等のことを行なう。たとえば、「亦」「様」を「また」「よう」、「宣敷」を

「よろしい」、「可成」を「なるべく」とするときである。場合によって漢字を改める場合もある。ただし、この方は、完全に改めることは困難で、便宜的となり、もとの漢字の使い方に従わざるを得ない場合もある。そういう不統一さが出来ようが、それらは、日本における漢字の使い方の複雑さからくるものと御諒承いただきたい。

(1) 啄木は当時の社会をどう見たか

啄木は当時の日本の社会をこう見ている。ちょうど、明治37.8年の日露戦争の直後の明治39年の時期である。

「日本が僅々50年間に驚くべき改革を成就した好運国であることは、予もまた是認するところである。そうして日本は今立憲國である。しかし、と自分は問う、この立憲國のどの隅に、真に立憲的な社会があるか？ 真に立憲的な行動が、幾度吾人の眼前に演ぜられたか？ 非立憲的な事実のみが跋扈（ばっこ）しているようなことはないか？ 政治上理想の結合なるべき政党が、この國に於ては単に利益と野心の結合に過ぎぬではないだろうか？ 民衆は依然として封建の民の如く、官力と金力とを個人の自由と権利の上に置いている無智の民衆ではないだろうか？ ああ、『今の日本』！ もし自分より一層元気の盛んな男が出てきたなら『日本は決して立憲國でない』と叫ぶようなことがないだろうか？ 予はここで筆陣を政治の分野に進めることはできぬ。諸兄は勝手に以上6個の？に就いて考えてみるがよろしい。」

「近代文明の特色は、いにしえのギリシアと同じく人種の抑圧を否定して個人の自由を尊ぶ点に存する。そしてロシアは実に君主独裁國なんだ。口人の最大多数はその一切の自由を、政治上並びに宗教上の主権者なるザーに奪われている。これに反してこの日本は立憲國である。日本人は口人に比して、実に幾倍と知れぬ多大の自由を与えられている。というと、どうやら日本が文明國でロシアが野蛮國のようだが、それは表面のこと、日本人は与えられた自由と権利とを、どれだけ尊とんでいるか。いかにして保持しているか。時として彼等は、その天の賜（たまもの）を金力や官力の前にすこぶる安直に売って、得るところの若干金を早速金にかえ、女にかえるようなことはないか。無智な民衆

ならまだしものこと、何万という人間の権利と自由とを代表する堂々たる代議士までが、その高貴なる寶物（たまもの）を自己の利害や野心のために捨てて顧みざるようなことはないだろうか。」

以上の引用はすべて「林中書」（「盛岡中学校校友会雑誌」第9号、明治40、.3.1）よりである。啄木の教え年21才、渋民尋常高等小学校代用教員に就職して約8か月後、明治39年11月から12月へかけての執筆である。この稿ではロシアと比較しつつ、日本人が自由の権利を有しながらそれを行使せず、無関心であることを指摘している。そして引用しなかったが、ロシア人が自由を求め、それを獲得するためにいかに努力しているかをこの稿で記し（注1）日本と対比させている。日露戦争で勝って、ますます富国強兵、軍国主義に進んでゆく中で、こう絶叫している若き啄木は注目に値するし、この啄木の時代から70年近く経過した今日なお、この啄木のコトバが生きているようなのが、事実であるのはまことに残念である。

(2) 啄木の教育界批判

啄木はその「林中書」で、当時の日本の教育について、いくつもの問いを投げかけている。そのうちの若干を引用してみよう。

「日本の教育者には、高俊、あるいは偉大なる人格によって、その子弟に人間の資格を与えるような人が沢山あろうか。はたまた、彼等『諸先生』は上級の学校に入り、もしくはある職業に就くため資格をのみ与うる一種の機械であらうか。如何。」「日本の教育者には、規定の時間内に規定の教材を教えれば、それで教育の能事終りとして、さらに他を省みぬ人がないであらうか。如何」等と叫んでいる。

また、啄木はその中学時代を回想し、「（当時）おぼろげに瞥見した『人生』という不可測の殿堂の梯（おもかげ）と、現在自分の修めている学科、通っている学校との間に何の関係もないらしいという感じ」を抱いたと書き、今日では「慚汗に堪えぬ次第であるが」「大抵の先生をさえこわれた時計の如く進むも退くも人生に何の影響なき人々であると思った。」と言い、そういう考えから「教育の価値」を疑ったといい、「何故学校に入ったろうと自問し」

「何故毎日学校へ行かねばならぬのかと考へ」始めたことを記している。

こういう啄木の質問や追憶について反論もあろうけれど、啄木の側に立ってみると、もっともな訴えであると思われる。満20才の青年なればこそこつ端的に言えたのだと思うが、これらのコトバは70年近く経過した今日、なお生きていて、どう解決すべきかを悩ませる。教育課程の改訂ごときではダメである。

「人生」や「人間」という課目を作っても、やはり単なる知識の授受に終るであろう。啄木はこういうことを教師の「人間」や「心」に求めているのであろう。

(3) 啄木の教師としての自負心

啄木が教師をしていた時代の「日記」を見ていると、自分自身を詩人として高く評価していることが認められる。そういう個所やその他の注意すべき個所を抄出してみよう。

「詩人たる自分の学ぶべき大学が、塵の都のいかめしい大建築であるとは思えない。故郷は、いわば、神が特別の恩寵を以て自分のために建てられた自然の大殿堂である。」（明39.3.4）

「あゝ、大きい小児を作る事、これが自分の天職だ。イヤ、詩人そのものの天職だ。詩人は実に人類の教育者である。」（明39.3.8）

「芸術の人はひろく一般人類の教育者である。しかしながら、詩乃至一汎芸術が教育の奴隷ではない。むしろ教育なるものは、芸術のうちの含蓄にすぎぬ。（中略）古来の大芸術品には、作者の意識と無意識に論なく必ず何らかの深大久遠なる教訓が含まれている。」（同上）

「来る四月より当村小学校に教鞭をとる筈に相成居候。月給八円の代用教員（中略）但し、自己流の教授法をやる事と、イヤになれば何時でもやめる事とは、郡視学も承知の上にて承諾せしに候へば（中略）私もこの故郷の狭き天地にありては、案外の信用もあり勢力もあり、たとへ俸給と席次が末席でも一村の教育に就いては、思ふままになる次第、あまり自慢にも成らぬ話に候へども、私に教へらるる児童は幸福なることと信じ居候。小児と遊ぶが大好きな私、何はともあれ、教壇に立つの日を少なからぬ興味を以て鶴首いたし居

候」(明39.3.10 日記中に記した与謝野寛宛の啄木書簡)

「余は、社会主義者となるには、余りに個人の権威を重んじている。さればと
いて、専制的な利己主義者となるには余りに同情と涙に富んでいる。所詮余
は、余一人の特別なる意味に於ける個人主義者である。」(明39.3.20)

「古人の教育と今人の教育との相違は、要するにその標準の相違である。い
にしえは『大』を標準としたが、今は『小』を標準としている。されば古人の
教育は偉人を生み、今人の教育は、天才を殺して平凡なる人形を作っている」
(明39.3.27)

「自分は時として、殆んどあり得べからざるような空想に耽ることがある。
(中略) これらの空想に寝食を忘れていた時は、自分は全くこれ完全全能の一
大天才で、世間一切の苦痛は皆、別の世界のことになってしまう。しかしなが
ら、これら一切の喜びも、一度、自分は詩人であると自省した時の喜びにくら
べては、全く空虚に等しい。これは前の喜びが空想の喜びであるからでなくて
所詮、自分が『詩人』であるからである。(中略) ああ、自分は詩人として生
れて来たのであったなと思うた時、余はただ涙も出るばかりに心から嬉しく思
うのである。」(明39.4.7)

「現実の世界は遂に詩の世界ではない。(中略) されば、詩人が同時に普通
の人間たることは殆んど不可能の事である。普通の人間は人間とともに居り、
詩人は神とともに居る。」(明39.4.9)

「自分は、一切の不平、憂思、不快から超脱した一新境地を発見した。何の
地ぞや、曰く、神聖なる教壇、すなわち、これである。」(明39.4.24~28)

「余は日本一の代用教員である。(中略) 余は遂に詩人だ、そして詩人のみ
が真の教育者である。」(同上)

以上は啄木が実際に教壇に立った4月14日以前のもものが多く、それ以後のも
のは二つにすぎない。この時期までは、詩人云々の自負、詩人はふつうの人間
と違ふと言ひ、詩人のみが真の教育者であるという自負心が強く出ている。そ
れが実際に教壇に立ってからは、そういう詩人云々の語が見えなくなってゆく
ようである。

それに関連するかどうか、啄木の新詩社観も変ってゆく。明39年3月11日の

日記には、与謝野寛への長文の自分の手紙を自分の日記に転載しているし、同4月1日～5日の日記では、「明星」桜花号所載の寛の長詩九篇について「これは氏が信仰の大海から汲み来った黄金の雫である。」と讃美し、さらに、その日記に寛からの手紙を転写している。ところが、翌年の明治40年1月18日の日記では、「このころ、新詩社乃至その他の派の詩を読んでも別に面白味も有難味も感じない。自分の頭が荒んで散文的になったのかとも考えたが、しかし、これは天上から詩が急に地上に落ちたためではあるまいか。」と書いている。詩が落ちたのではなく、啄木の感じ方が変わり、啄木自身、明星ロマン主義から離れ始めたのである。本稿の付記でこの期に啄木が小説に熱心になっていることを記すが、啄木自身詩から散文への道を進んでいたのである。

啄木は浜民村教員時代ののち、「郷里から函館へ、函館から札幌へ、札幌から小樽へ、小樽から釧路へ——私はそういう風に食を求めて流れ歩いた。何時しか、詩と私とは他人同志のようになっていた。(中略)生活の味わいはそれだけ私を変化させた。『——新体詩人です。』と言って、私を釧路の新聞につれて行った温厚な老政治家が、ある人に私を紹介した。私はその時ほど烈しく、人の好意から侮蔑を感じたことはなかった。」(「弓町より 食ふべき詩」東京毎日、明42.12.2)と変って行った。その文章で、啄木は「詩人たる資格は三つある。詩人はまず第一に『人』でなければならぬ。第二に『人』でなければならぬ。第三に『人』でなければならぬ。そうして実に普通人のもっているすべての物をもっているところの人でなければならぬ。」とも書いている。これは、さきの明治39年4月9日の日記と全く違っている。啄木は、こう成長してきたのである。また「実務には役に立たざるうた人と我を見る人に金借りけり」(『一握の砂』明42.9.9作)も、いわゆる詩人歌人を恥ずる心を詠じている。

こういう詩人、歌人観へ踏み出したのは、さきに記した浜民村教員時代の明治40年1月18日の日記からであろう。

さて、もとへ戻って教師時代の啄木のことばを日記から拾ってゆこう。

「予が幼くしてあの村の小学校に学んだころ——神童と人にもてはやされたころから、すでに予は同窓の友の父兄たる彼らからある嫉視を受けていた。」

(明39.「80日間の記」4.29～8.19) (筆者記——この記事は、浜民村で啄木の小学校就職、啄木父の宝徳復帰について、反対派と味方とがあることを記した文章の中の一節であるが、自らを「神童ともてはやされた」という一文があるので書きぬいて置いた。)

「浜民村尋常高等小学校で、一番生徒に信用ある先生は、と問うたなら——ああ、予の九か月の努力は決して無益ではなかった。予は小学教育を認めていた。そして予は小学教育者として確かに成功しつつあるのだ。予に教えらるる小供らは、この日本の小供らのうち、最も幸福なものであると予は確信する。そして、また、かかる小供らを教えつつ、彼らから自分の教えることよりも以上なある教訓を得つつある予もまた、確かに世界の幸福なる一人であろう。(中略)『勝った日本よりも、まけたロシアの方が豪い』と教えている予は、そもそもどういう人間を作ろうとしているのであろうか。(注2)かえすがえすも、浜民村の一代用教員は危険なるかなである。」(明39.12.8～19)

「現代教育の恐るべき欠陥についても常に考えた。そして自分の理想の学校設計までやってみた。しかし、これらは皆すくなくとも今の自分には実行のできぬ事のみであった。」(明40.1.29)

この他に、明治40年3月20日に行なわれた卒業送別会を先徒自身によって計画させ、司会させたことを記して「これも予が過去一か年間の生活の決して無意味でなかったことの一つの証拠ではなかるうか。」と記している長文の日記があるが、第五節で引用するので、ここでは指摘するにとどめておくが、教職についたのちは、詩人云々の語は見えなくなっている。しかし、教師としての自負心は強く、しかも、上記の明治39年12月の日記のように根拠を示しているので、その自負ももっとも感ぜられる。またその12月8～19日の日記中で、教師をしつつ小供らから教訓を得つつある自分も世界の幸福者であると記して、教師をしつつ成長してゆく自分を自覚している点に、伸びゆく啄木が見られる。

以上が啄木教師時代の日記よりのぬき書きであり、ここに啄木らしい自負心が見られるが、その自負心のうちにも変化と成長が見られるのである。

(4) 子どものまま成長させたい

啄木は学校教育中、小学教育を最も重視している。日本の教育は、その精神に於て、昔の寺小屋教育よりも劣っている。「日本の教育は、人の住まぬ美しい建築物である。別言すれば、日本の教育は『教育』のミイラである」と言い、その「ミイラへ呼吸を吹き込むには、小学校の門からするのが一番だ。」（林中書）と言っている。ただし啄木は小学校教師としては、高等科（当時は尋常科4年、高等科4年で、高等科2年を修了すると中学校入学の資格を得たのである。）を教えたかったようである。彼が尋常2年を教えることになったことについて「自分が教壇の人となるのが、単に読本や算術や体操を教えたいのではなくて、できるだけ、自分の心の呼吸を故山の子弟の胸奥に吹きこみたいためであるのだ。それには高等科あたりが最も適当である。十二三才から十五六才までが人の世の花の蕾もふくよかに育つ時代で、一朝開華の日の色も香も——乃至は、その一生に通ずる特色というもの——多くこの間に形づくられる。尋常科の2年年と言え、まだホンの頑是ない孩提に過ぎぬので、自分の心の呼吸を呼び込むなどということは、夢にもできうることではない。しかし、彼等の前に立った時の自分の心は、怪しくも抑えがたなき一種の感激に充たされるのであった。神の如く無垢なる50幾名の少年少女の心は、これから全くわが一上一下する鞭に繋がれるのだなと思うと、自分はさながら聖（とうと）いもの前に出た時の敬虔なる顫動を自分の脈管に波打たした。（「渋民日記」明39年4月11日～16日）と記している。高等科生を教えたいのだが、小学2年の「神の如く無垢なる少年少女」の前に立った教師の感動をこの文章で啄木は記しているのである。

また、啄木は「一握の砂」（「盛岡中学校校友会雑誌」第10号、明治40.9.20）で、小児を讃美し続けている。「稚児を見よ。その目の清（すず）しきはみ空の星の如く、その頬のふくよかに麗しきは、なべての花にも木の実にも劣らず。物見るに怖れといふものを知らず。泣くにも笑むにもわが心のままにて、欲しと思ふ物あれば手をさしのぶるに誰憚ることなく。神の加き無邪気とはこれなるべし。」「神の如く無邪気なる小児ほど、何物にもまして貴きものはなからむ。」と小児を礼讃している。しかし、その神の如き小児も成長するにし

たがって「我とわが心の自由を殺し」てゆく。「人の思惑にのみ心を牽かれて、心ならざる事を言ひ、又は行ふに至り、茲に一切の悪徳生る。」ということになり、「かの小児の心の全く死し尽したる時、人は之を称して成人したりと謂ふ。小児は成人の父なりとは湖畔の詩人が歌へるところなり。然れども、之を今の世に見るに、人は成人たらしむとして先づ小児を殺さざるべからず。噫、神は小児を作りき。然れども人は成人を作りぬ。」そこで、啄木はこう言っている。「世に最も尊きもの三あり。一に曰く、小児の心。二に曰く、小児の心。三に曰く、小児の心。ああ、生れたる儘にて死ぬる人こそ、この世にして一番エラキ人なるべけれ。」そして、成人がその小児の心を失っていることについて、「我等常に思へり、願へり、祈れり、我等をして自然ならしめよと。

（中略）我等何故に赤裸々なる能はざるか。公明なる能はざるか。天真なる能はざるか。大いなる声にて物いふ能はざるか。行かむとして行き、為さむとして為し、心のままに笑ひ又泣く能はざるか。その理あるなし。然らば即ち、我等は正に『正しき反逆』の児たらざるべからざる也。長なへに真にして且美なる自然の為に、憎むべき反逆を企てつつある人類に向って、我等の『正しき反逆』は最も勇敢に戦はれざるべからず。（中略）我等一度彼等が唯一の殺人器たる『教育』を破壊し尽さば、彼等また何によりてか戦はむ。」

以上はすべて「盛岡中学校校友会雑誌」第10号所載「一握の砂」よりの抄出である。明治40年9月刊の同誌所載の文章であるので、浜民小学校辞任後、函館時代の執筆であろうが、その教員時代にもすでにこう書いている。「人が一人前になるということは、持って生れた小児の心をスツカリ殺し了せるということである（中略）山には太古そのままの大木もあるが、人の国には薬にしたくとも大きい小児は居なくなった。ああ、大きい小児を作る事！これが自分の天職だ。イヤ、詩人そのものの天職だ。詩人は実に人類の教育者である。」

（「浜民日記」明39.3.8）

啄木は小児を純真、神の如きものと見、それを失わせるのが大人の世界であり、教育であると見ている。（注3）それ故に、そういう小児の自然の心を失わせるのを、人間の自然、神に対する反逆である。その反逆に対し、さらに「正しき反逆」を起そう、そのために戦おうというのである。そのために、彼

らの持っている「教育」という機械を破壊しようというのが啄木の考えである。敵をたおすには敵を知らねばならない。破壊のためには最も破壊しやすいところを偵知せねばならぬ。その破壊のためには「小学校の門からするのが一番だ。」（「林中書」）というのが、小学教育を重んずる啄木の考えである。

そのためには、啄木は文部省の定めた教授細目を軽んじ、自らそれを作ろうとし、各科毎の教育より総合教育を重んじ、自由、自主、愛の精神をもって行なおうなどという考えを抱いている。

(5) 啄木の教育の実践

啄木日記によれば、明治39年7月3日夕から、はじめて小説を書き出したという。『雲は天才である』がそれである。これを途中で休んで8日から13日までの6日間に『面影』という140枚許りのものを書いたとその日記に記している。そのため『雲は天才である』は中絶したが、11月中旬、その一部を書き直したと日記に記している。その原稿は、今日、残っていて、筑摩版全書解題によれば、三か所が見せ消ちになっているよして、あまり、訂正は行なわれなかったと考えられる。この小説は、「日記」「林中書」とともに啄木の教育観を語る重要な文献である。

この『雲は天才である』は小説であるが、啄木が勤務したころの波民尋常高等小学校の実際を舞台としていると見られる。ただし、「春まだ浅く月若き云云」の唱歌を作って校長と争ったことはこの稿執筆時の事実ではあるまいと私考するが（注4）こういうことを記しているところに後記するような啄木の教育観がうかがわれると思うのである。

この小説にあって、啄木の教育観として注意すべき点がいくつかある。その第一は、文部省制定の教授細目を軽視していることである。校長は、啄木の分身である代用教員新田耕助に対して、「学校には畏くも文部大臣からのお達しで定められた教授細目というものがある。算術国語地理歴史はもちろんのこと、唱歌裁縫の如きにさえ、チャンと細目ができている。実に立派なもので、精に入り微をうがつとでも言おうか。本当の教育者はその完全無欠な規定の細目を守って、一毫乱れざる底（てい）に授業を進めて行かなければならない。」

そうでなければ、生徒の父兄、村役場にもすまないが、大にしては大日本の教育を乱すという罪にも坐する次第で、これが我々教育者にとって最も大切な点であると言うのである。この小説では、その教採細目に対する直接の批判は見えないが、この校長のコトバ自体の記載の中に教授細目への冷評が見られる。さらに、この小説中で啄木はこの校長を「完全なる『教育』の模型として、既に十幾年の間、身を教育勅語の御前に捧げ、口に忠信孝悌の語を繰りかえすこと正に一千万べん、その思想や穩健にして中正、その風采や質樸無難にして具（つぶ）さに平凡の極致に達し、平和を愛し温順を尚ぶの美風」と冷評している。啄木の別の小説『足跡』（「スバル」1の2、明42.2）は、『雲は天才である』と同じ人物構成であるが、その中で女教師が友人に対して、「教育者には教育の精神をもって教える人と教育の形式をもって教える人と二種類ある。」とあって学校で教えられたが、啄木をモデルとしている千早先生のことをその前者として報じている。啄木は女教師にそう書かせたことによって、自ら、そういう教師であるという自負心を持っていたことがわかる。

また教授細目についてではないが、教育の形式を重んずることに対する啄木の批判とも言うべきが『林中書』の中に見える。「学制の整備という点に於ては、種々非難すべき問題も少なからずあるけれども、ともかく日本は東洋一である。しかし、学制の完全不完全は、人間を教育するという大問題を論ずる際に当っては、決して重大なことではない。完全無欠な教育学、それから割り出した完全無欠の学制、これらはもちろんあっても、差しつかえもないが、また無くても別段不自由は感じないものだ。真の人と真の精神とあれば、他に何ものが無くても立派な教育はできる。もしそれ、完全な教育学と学制とがあっても、それを活用する『人』が無ければ、一切のものが無いよりもまだまだ危険な結果に陥る。」と記しているのである。

このように啄木は文部省の定めた学制や教授細目を軽んじて、形式より教師その人が大切だと叫んでいるのであるが、実際的に啄木はどうしようとしていたのであろうか。それは前記したように「自分が教壇の人となるのが、単に読本や算術や体操を教えたいのではなくて、できるだけ、自分の心の呼吸を故山の子弟の胸奥に吹きこみたいためであるのだ。」（『渋民日記』明39.4.11～

16) というのであって、各科の教育を目ざすのではなく、人間教育というか、総合教育というか、そういうものを目ざしていることを語っているようである。したがって、その教授法についても「教授法に於ては、先ず手始めに、修身、算術、作文の三科に自己流の教授法を試みている。文部省の規定した教授細目は『教育の仮面』にすぎぬのだ。」「(『済民日記』明治39.4.24~28)と教授者自身の立場からの教授法を主張しているのである。そして、その成果を友人に「予は就職以来日なほ浅し。しかも誰かまた予の如く生徒の心服を買ひ得るものぞ。」(小笠原謙吉宛書簡、明治39年5月11日)と誇っている。同じことを自ら「済民尋常高等小学校で一番生徒に信用ある先生は、と問うたなら、……ああ、予の九か月間の努力は、決して無益ではなかった。予は小学教育に重大なる価値を認めていた。そして予は、小学教育者として確かに成功しつつあるのだ。予は衷心から、天を仰いで感謝する。予に教えられる小供らは、この日本の小供らのうち、最も幸福なものであると予は確信する。そしてまた、かかる子供らを教えつつ、彼らから、自分の教える事よりも以上なある教訓を得つつある予もまた、確かに世界の幸福なる一人であろう。」「(『済民日記』明39.12中)と記している。啄木の教育は成功していたと考えられる。

また、啄木の教育の重要なものと考えられるものに、その科外教育がある。実は前記したように高等科を教えたかったのであるが、尋常科二年の担任となった。高等科生を教えたいという念願を抱いていたことがこの科外教育の一理由であろうが、しかし、自ら、労多い科外教育に踏みきったのである。「(4月)26日から高等科生徒の希望者へ放課後課外に英語教授を開始した。二時間乃至三時間ぐらいつけさまにやって、生徒は少しも倦んだ風を見せぬ。二日間で中学校で二週間もかかってやるぐらい教えた。始めの日は21名、翌日は24名、昨日は27名、生徒は日一日とふえる。」「(『済民日記』明30年4.24~28)と日記に記しているし、また友人への手紙で「朝起きて直ちに登校す、受持は尋常二年也、十分休み毎には卒業生に中等国語読本を教ふ、放課後は夕刻まで英語の課外教授をなす、一日自分の時間といふものなし、夜は種々の調査、来客に忙殺せらる。また時々近隣の女生徒を集めて、作文の教授をなすことあり、我が談話をきかんとする青少年の来襲に逢ふことあり。」(小笠原謙吉宛書簡、明

39.5.11) と記している。この文章中の「卒業生」というのは尋常科卒業生で、現高等科生であろうか。また、秋になると、自宅で、朝読ということを始め、学校でも高等科で、正規の時間に地歴作文を教えることになったことを日記に記している。「いささか感ずるところあって、十月一日から、自宅で朝読を始めた。男女二十人ばかりの生徒が、夜のまだ明けはなれぬころから、われ先きに集ってくる。この一事だけでも、この朝読が善良な感化を与えていることがわかる。(中略)学校の方では、受持の尋常二年の外に高等科の地理歴史と作文とを併せて受持つこととなった。高等科の生徒は非常に喜んでいる。」「(淡民日記)明39.10)また「この日より毎日五分間か十分間宛、尋常2年及び高等科に、簡単なる英語会話を教ふることとしたり。」「(日記)明治40.1.10)等と記している。

小説『雲は天才である』の中でも「この校の職員室に末席をけがすようになっての一週間目、生徒の希望を容れて、というよりはむしろ自分の方が生徒以上に希望して開いたので、初等の英語と外国歴史の大体とを一時間宛とは表面だけのこと、実際は、自分の有(も)っている一切の知識、一切の不平、一切の経験、一切の思想——つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機をうかがい、時を待ってわが舌端より火箭となって迸る。(中略)疑いもなくこの二時間は自分が一日二十四時間千四百四十分の内最も得意な、愉快的、幸福な時間で、大方、自分が日々この学校の門を出入する意義も、全くこの課外教授がある為めであるらしい。」と記している。この課外教育は、文部省制定の教授細目から離れた、啄木教養の一切をもって、生徒にその言いたいことを訴えたもので、単なる一科目についての教育ではなかったようである。

また、啄木は『雲は天才である』の中に啄木の分身である新田耕助が作詞、作曲し生徒たちが歌った歌が収められている。その第二連は次のようである。

「自主」の剣(つるぎ)を右手(めて)に持ち、

左手(ゆんで)に翳す「愛」の旗

「自由」の駒に跨りて

進む理想の道すがら、

今宵生命の森の蔭

水のほとりに宿かりぬ。(注5)

これによれば、啄木は、「自主」「自由」「愛」をかざしつつ「理想の道」を行こうと言っているのである。この三テーマについては、すでに本稿で書き記しているように思うが、その「自主」について書き足しておきたいことがある。その一は、啄木が、渋民小学校の送別会(明治40.3.20)を全部生徒にやらせたことである。すこし長文になるが、日記からその詳細を書きぬいておこう。その日校長不在、天気はよい、生徒は喜んで午後一時の開会を待った。

「この送別会は、一切生徒にやらせたので、接待係、余興係、会場係、会計係、何れも皆生徒、やはり生徒から出した三名の委員長の招待状によって、定刻になると、この村の紳士貴女十数名臨席せられた。生徒などの招待状で紳士を招くというのは、この村開闢以来のことである。さらにも一つ開闢以来なことは、立花委員長の開会の辞に於て、この村の人は初めて「紳士貴女諸君」と呼ばれたことである。生徒の演説独唱、いずれもうまくやったが、とりわけて自分の組であった尋常二年の、九ツ十という小児が五人、何れも上級生以上の出来榮えであったのが、予にとって何よりの喜びであった。喜び極って落涙を催すぐらいであった。

卒業生演説もすみ、来賓演説となったが、互に相譲って中々出る人がない。突如会場係長は立って、「只今金矢さんのお話がありますから皆さんお静かに」と紹介した。郡参事会員金矢氏の狼狽した顔の面白さ、予は会場係長が、喰って了いたいほど可愛かった。これが僅か十三四の少年であるとは、人は思うまい。金矢氏は遂に立って、喜色満面に溢るという態で、滑稽交りに一場の訓話をされた。この筆法によって、さらに数人の来賓を立たしめた。

予がこの日の会のために作って与えた『別れ』の歌(注6)、高等科女生徒五人の合唱には、堀田姉のオルガン、予のヴァイオリンの伴奏で、この日最も美しい聴き物であった。茶菓もすみ、数番の楽しい余興もすんで、散会が日の落つころ、これから決算となると、収入金額七円、残金一円五十幾銭。これでまた菓子を買って委員慰労会を開かせた。

満足と喜びとを胸一杯にしながら帰ったが、どうも坐ってはいられない。役場に行ってみたところが、岩本助役氏は正に寝酒の独酌中であつたが、まじめ

になって『今日の生徒の活動には涙が出るほどうれしかった。年を老ると、どうも涙もろくなりますでな。イヤ、これからは、何事を措いても教育のために尽す考えです。今日は実に非常に感じて来ました。』との話。予は、所期の水泡に期せなんだことを謝する心に、眼の曇るを覚えた。

十時ごろ帰ったが、心がまだどうしても静まらぬ。すなわち、今日の会の詳しい模様と、それから我が学校に関する自分の希望とを細々と書いた手紙を平野郡視学宛に認めて、漸う眠ることができた。

生徒の活動ぶりの愛らしかったこと、ああ、これも予が過去一か年間の生活の決して無意味でなかった一つの証拠ではなかるうか。」（「明治四十年丁未歳日記」3月20日）

長文であるが煩をいとわず記すこととした。ここに明治40年3月東北岩手県の一寒村の卒業送別会の有様が記されており、これを自己の一年間の教育の効果と考えて、「満足と喜び」に満ちている啄木の姿が写し出されている。

また、明治40年1月7日の日記に「予の代用教員生活は恐らく数月にして終らむ。予はその間に出来るだけの尽力を故山の子弟のためにせざるべからず。新春第一に先づ予の遂行せむとする計画二あり。生徒間に自治的精神を涵養せむとするその一也。とかく田園にまぬかれ難き男女間の悪風潮を一掃して、新らしき思想を多少なりとも呼吸せしめむとするその二也。このためには、先づ『生徒間の制裁』を起さしむる必要あり。又愛（いと）しき子弟の教人を犠牲とせざるべからず。今日よりこれに着手したり。」と記している。そしてこの第二については、翌日および翌々日を費して、事を処したことを日記にくわしく記している。7日の日記では、その生徒間の悪風潮を正すためには「生徒間の制裁」を起させようとしているが、8日、9日の日記によれば、啄木は7日に早速教人の生徒を呼び、若干の事情を知っていたし、その事を生徒たちは伝え聞いて知っていたので、結局啄木と生徒との間の話し合いに終り、「自己の行為を内心より悔悟するものあらば、今日中に来りて予に一切を自白すべきことを命じ」その生徒たちの自白、涙の懺悔によって解決し、「生徒間の制裁」に至らなかったようである。その9日の日記には、罪をわび、再び犯さないことを誓った生徒たちを含む高等科生に啄木は教室で、諸君は「涙の懺悔」

によって「浄き人」になった、「再び、自ら悪しと思ふ事をなす勿れ。」と述べ、生徒たちの涙、すすり泣く子らを前にして啄木自身も「胸ふさがりて辞甚だ洩るを覚えき。予は危くも声をあげて泣かむしたり。」と記し、かつ、そのあとに「何なれば斯くも——喰ひつきたき程可愛きにやと予は心に思へりき。」ここに啄木の愛情がまざまざと記されている。

結局、啄木の教育は、自由、自主、自治、愛等のことばでまとめ得よう。

また、最後に付記しておくが、啄木は、教員を辞職して北海道へ渡ってからの文章『小学教師に望む事』（「小樽日報」明治40年12月6日）の中で、「学科の教授法（おしえかた）の巧拙（よしあし）よりも、子供に人格（ひと）としての大きい深い感化を与えて貰いたいという事」というのを第一に記していることも、本節で記してきたことと一致していると思う。

(6) 啄木の考えた教育の目的

天才教育と人間教育

啄木は教育の目的を「林中書」でこう書いている。教師経験8か月のころである。

「教育の最高の目的は天才を養成することである。世界の歴史に意義あらしむる人間を作ることである。それから第二の目的は、かかる人生の司配者に服従し、かつ尊敬することを天職とする健全なる民衆を育てることである。」

ここで彼は、教育の目的を天才養成とそれに従う民衆を養成するにあると言っている。ところが、この文章に続けてこう書いている。（注7）

「また、別な言葉で言うと、教育の真の目的は、『人間』を作ることである。決して、学者や、技師や、事務家や、教師や、商人や、農夫や、官吏などを作ることではない。どこまでも『人間』を作ることである。ただ『人間』を作ることである。これでたくさんだ。知識を授けるなどは、真の教育の一小部分にすぎぬ。」

ここでは人間教育を主張し、職業教育、知識教育を否定している。この前段と後段では、啄木は教育の最高目的は天才養成であると言い、教育の真の目的は人間養成であると言っているのであって、「最高」と「真」の二つの違いに私はとまどうのである。しかし、啄木にはこういう矛盾、撞着がしばしばあっ

て、私たちを迷わせ、あるいは、一般人に啄木を軽視させるもとにもなるのであるが、ここに啄木のゆれを見、そういう中から進んで行く啄木を認めるべきでないかと私は考えている。

さて、ここで、啄木が言っている天才は、「世界の歴史に意義あらしむる人間」である、「司配者」であり、この引用の文章の前段で「『世界の歴史はただこれ大人物の伝記なるのみ』とカーライル先生が道破した。」と記している。その「大人物」を「天才」と言っているに違いないが、天才、大人物というのは学校で養成できるものではあるまいと私考するが、啄木はこの同じ文章で偉人、大人物と違った意味で天才の語を使用してもいる。

㊤「人は誰しも能不能のあるもの。得意な学科もあり、不得意な学科もある。そして得意な学科にはおのずと多量の精力を注ぐものであるのに、一切の学科へ同じように力を致せと強うる教育者、——つまり、天才を殺して、凡人という地平線にころがっている石ころのみを作ろうとする教育者はないであろうか。如何。」

この文章に見える天才は、学校の一教科に興味を持って、それに精力をそそぐものをさしているようである。それに対して、特徴のない人間を凡人と呼んでいるようである。またこういう文章も「林中書」に見える。

㊦「日本の中学校には、他の学科が如何に優秀でも、一学科で40点以下の成績を得ると落第させるという学校はないであろうか。如何。また、そういう生徒はなるほど全科卒業という証書を貰う資格はあるまいが、人間という資格はやはりそれで欠けているのであろうか。如何。」

この㊤㊦二つの文章には、学校教育に興味を失い、欠席がちとなり、カンニングをして、遂にその年度の卒業が不可能となって、退学した啄木のひがみと、その後、詩集『あこがれ』によって、新進詩人として世にもてはやされた自負心がこもっているようである。そしてこの㊤㊦二文に、啄木は、自分は「天才を殺して凡人を作ろう」とする教育制度の被害者である。自分は凡人でなく、人間である、天才の側であると叫ぶ心が、ここに見えるようである。そういうことを考えつつこの㊤㊦二文を読むと㊤の天才は、㊦の人間に結びつくようである。

啄木は天才を俗にいう偉人、大人物の意に使いつつ、一方具体的に「一分野に秀でたもの」「凡人ならぬもの」の意に使っている。その人間のもつ個性を生かすことを、人間養成と言っているのではあるまいか。そう考えると、「天才養成」と「人間養成」とは矛盾するものではないようである。「得意な学科に多量の精力をそそぐ」のが天才への道であるように言っているのであるから、天才はいわゆる偉人、大人物ばかりではないのである。

しかし、以上はややゴジツケの感がなきにしもあらずで、啄木には、以上の考えも根底にはあったろうけれど、一方、教育の第二目的として、本節のはじめに記したように、天才——人生の司配者に服従する健全な民衆の養成と言っているのは、国民を、支配者、被支配者とに分けているのであって、人間養成論とくいちがってくる。ここに啄木の考え方の矛盾があって、啄木にはやはり、人間養成と言いつつも、啄木自身に英雄崇拜思想があり、自ら英雄的たろうとする心があったのであろう。

『雲は天才である』中の、啄木の分身新田耕助の作った歌の「『自主』の剣（つるぎ）を右手に持ち、左手（ゆんで）にかざす『愛』の旗、『自由』の駒にまたがりて、進む理想の道すがら、今宵生命の森のかげ、水のほとりに宿かりぬ……」の歌中の人物は、民衆の姿でなく、壮士の姿であり、変じて大人物となるべき人物であらう。ここに明治青年の夢があり、明治日本のロマン主義があるのであろう。こういう精神を啄木は抱きつつも、一方、人間教育論をも主張しているのである。

ところが、この「林中書」執筆より約1か月後の「啄木日記」（明40.1.6）には、押川春浪の英雄小説を生徒から借りて読み、自分も他日、一英雄小説を書こうと記し、春浪の英雄小説は日本の英雄が「世界の現状を破壊して武俠の日本が世界を統一せむことを計画しつつ」あるが、自分の書こうとする英雄小説に描かれる人物は「『人間』なり、『生ける人間』なり、『思想するが故に生ける人間』なり。彼は勇ましき人生の戦士なり」と記している。啄木は「天才」よりも、「人生の司配者」よりも、ここでは「人間」を「人生の戦士」を重んずるようになっているのである。「林中書」が、もう二か月おくれて書かれたら、「教育の目的」の天才教育論と人間教育論とがどうなっていたらう

か。

その後、明治40年4月19日、啄木は校長排斥のストを高等科生を率いて行ない、校長転任、啄木免職となった。啄木は函館に移住、その地の文芸誌「紅苜蓿（べにまやごやし）」に参加、編集にたずさわったが、その第七冊（明40.7.10）に小説『漂泊(-)』短歌『曾保土』文芸時評『六月の雑誌界』の三篇を書いている。その「六月の雑誌界」では、「新小説」「明星」「帝国文学」所載の諸篇について批評しているが、その「明星」についての文章中において、啄木は高村光太郎の八篇の詩を激賞している。そしてこう言っている。

「巧みな詩と、好奇心を満足させる詩と、小間物屋の店のような詩の多い世に、これはまた何としたことであろう。深い深い谷の底からゴーツとって色のない嵐が吹いて来た。昼寝していた自分はムックリ跳起きて、あらん限り胸を拡げて縁側に立った。この嵐にはするどい針がある。その針に黙って心臓を刺させる心地は何ともいえない。実に何とも言えない。巧みな詩、好奇心を満足させる詩、小間物店のような詩、これらが果して詩人の詩であるならば、鋭い針を持った谷の嵐は人間の声である。人間は詩人よりも豪い、と自分は思った。人は何というか知らぬが、自分は高村氏が豪いと思う。」

高村氏が豪いのは「人間」だからである。「林中書」を書いてから約半年である。修飾がついてはいるが、「詩人」より「人間」が豪いと言っているのである。この時点で、啄木が「教育の目的」を書いたらどうであろうか。おそらく、修飾語をつけるかも知れないが、天才養成より人間養成を先ず書いたであろう。

これより、また半年後、啄木は「小樽日報」（明40.2.6）に「小学教師に望むこと」を書き、その最初にこう書いているのである。

「学科の教授法の巧拙より、子供に人格（ひと）としての大きい感化を与えて貰いたいということ、教育学とか教授法の難しい議論ばかり研究したとて別段益（やく）に立ちません。」

各科教育より人間形成を啄木は訴えているのである。「林中書」「春浪英雄小説論」「高村光太郎詩評」そしてこの稿と、啄木は人間養成教育を重んずる方向へ進んでいるのである。一時点の啄木を捉えて矛盾を云云するよりも、

その成長を見てゆかねばならぬことが、誰の場合でもそうであろうが、特に啄木の場合必要であると思う。こう見れば、啄木の教育の目的は、「天才教育と人間教育」とから順次「人間教育」へと移ってきたことが明らかになったと思う。

付 記

啄木が浜民村で教師になったのは父の宝徳寺復帰運動を郷里で行なうためであったが、彼自身も教育にかねてより関心を抱いていたことによるが、一方この教師時代にはじめて小説を書き始める等小説に関する関心が強まっている。それがどういう意義を持っていたかを、ここで考えたいと思う。

啄木は明治39年4月14日初めて教壇に立った日、日記にそのことを記して、さらに「自分は今まで無論、教育ということについて何の経験も持っていない。しかし、教育の事に一種の興味を持っていたのは一年二年の短い間ではない。再昨年あたりから、一切を放擲して全く自分の教育上の理想のためにこの一身を委せようかと思ったことも一度や二度の事ではない。」と書いている。一昨昨年明治36年は、中学中退後上京、病気のため帰郷した時で、教師になろうと考えたことも考えられるし、一昨年、明治37年には浜民村にあって、時の校長を排斥し、転任させている。一年前の同じころ、啄木は東京にあって金田一京助あてに「一時は皆ナンデモ捨てて田舎の先生にでもなろうと考えたぐらい」（明38.4.1）とたよりしている。その前年12月、父が宗費滞納のため宝徳寺住職を罷免され、この年3月2日宝徳寺を退去している。東京にあって啄木はその事を知り、上記書簡の前文で、この呑気の小生も懊惱し煩悶していると書いている。ただし、処女詩集『あこがれ』刊行直前でもあった。東京から、盛岡へ居を移している父のもとへ帰ってきたのは5月の末であった。以後盛岡での生活で、雑誌「小天地」を刊行したが一号にとどまり、啄木一家の生活は窮乏の一途をたどり、遂に翌明治39年3月4日浜民村へ帰り、4月13日代用教員の辞令を受け、14日はじめて教壇に立ったのである。なお盛岡時代「岩手日報」に「閑天地」と題する随筆を連載しているが、（明38.6.9～7.18）その第五回に「世の教育者よ」と題する一文を書き、植木屋が植木を育てる心を記

し、教育者にその心を抱くように訴えている。啄木の教育に対する関心は彼の言うように早くよりのものであろうが、彼は、詩に対する関心の方が深く、そのため、それまで、教師にならなかったであろう。

生活困窮の中で、その打解のため、啄木は父の宝徳寺復帰を考え、そのためには渋民村へ帰って村人の賛成を得なければならない。渋民村で啄木のなしうる仕事は教師以外はなかったろうと思われる。啄木はかねての関心と、この必要とから教師になったのであろう。ただ、啄木も教育のことには以前から関心を抱いていたので、熱心にそのことに従い、その中で啄木自身も成長して行ったと考えられる。

その教師時代については本稿で書き来たところであるが、この期の日記を見ているとこの時期に小説に対する関心を強く持っていることに驚かされる。盛岡時代の日記は残っていないので明らかでないが、啄木は渋民村へ帰った翌々日すでに「小説を書かねばならぬ。」(明39.4.6)と日記に記している。同3月11日には与謝野寛に手紙を書き、数篇の小説を脱稿したいと書いている。

6月10日から二週間の農繁休暇があったので、啄木は上京、十日間新詩社にとまっている。その間「近刊の小説類も大抵読んだ。夏目漱石、島崎藤村二氏だけ、学殖ある作家だから注目に値する。アトは皆駄目。夏目氏は驚くべき文才を持っている。しかし『偉大』がない。島崎氏も十分望みがある。『破戒』は確かに群を抜いている。しかし天才ではない。革命の健児ではない。(中略)『これから自分もいよいよ小説を書くのだ』という決心が、帰郷の際唯一の予のお土産であった。」(「渋民日記」80日間の記)そしてその直後ともいうべき7月3日夕から書きはじめたのが、処女作『雲は天才である』である。すでに啄木はこの上京前の6月10日ごろ、啄木と啄木一家を中心とした「村の種々の騒擾を採って、他日一の大小説をものしようと思った。」(「80日間の記」)と記して村の状態を述べている。実は、啄木の帰った渋民村について、啄木はすでに3月23日の日記において、啄木帰郷について村民の間でいろいろと言われていることを記し、「しかしまた、静かに観察するとなかなか面白いものである。戸数百にも足らぬ小部落でありながら、藩閥もある。御用党もある。在

野党もある。中立党もある。策士あり、硬骨漢あり、無腸漢あり、盲従漢あり、野心家あり、そして策をめぐらして蝸牛角上に相争っている。先日在野党の主領が来て酒を呑んで行った。それで今日は村長が学校のかえり（筆者補、この日は小学校の卒業式であった）に寄って、自己の地位を弁解して行った。ところが二時間とも経たぬ間にまた在野党の主領が来て局面転換を企てる。所へまた野心家の御用党が飛び込んで、苦肉の策をやる。イヤハヤ、一村の小有一國の大も同じような呼吸サ。もしこれで舞台が広がったら、自分も何とか動く気になるかも知れぬが、所詮自分来たのは（ママ）、彼らに一つ苦の種がふえただけの事である。」（明治39.3.23）と記しているが、「父が帰って来て、宝徳寺再住の問題が起るに及んでわが一家に対する陰謀は益々盛んになった。如何にもして我が一家を閭門の外に追ひ出そうとするのが、彼ら畢生の目的であった。」（明39「80日間の記」）という風に進んで来、啄木の味方と反対派とができた。そして「かくて我が一家を——つまり予を中心とした問題が、宗教、政治、教育の三方面に火の手をあげて浚民村を黒煙に包んでしまった。この戦争は、十九世紀の初の仏国王党と革命党との戦争そのままである。かくて六月の初め、一大打撃が来た。畠山（村助役）は群犬の奸悪なる謀計によって、突然辞職せざるをえなくなった。（中略）予は狂える如くなった。一夕校長を捉えて、気味悪い嚇し文句を三時間も述べた。その夜はこの嚇し文句のために敵党は数時間も秘密会議を開いた。（中略）翌日から学校の校長やこの村土着の訓導などの予に対する態度が変った。下にもおかぬお世辞を言う。けだし、彼らは、なるべく予を怒らせぬようにして、ダマして置いて、陰に追ひ出す計画をしようすることに会議をきめたらしい。」（同上）ということになっている。いささか誇大妄想のようであるが、ここで啄木は上京して、新詩社で近刊の小説を読んで来て、書きはじめたのが「雲は天才である」である。上京前は村全部を舞台にしようと考えていたのを、小学校内にとどめて、啄木と校長との対立から小説を始めたのは、村全体を扱うのは啄木の手には負えなかったのかも知れないが、このように舞台を小学校職員室にちぢめたのが、かえって成功したのかも知れない。

啄木はこの「雲は天才である」を途中で休んで、七月「八日から十三日ま

で六日間に『面影』という百四十枚許りのものを書いた。」(同上)そして調子にのって、「予は今非常に愉快である。すべてのものが皆小説の材料なように見える。そして予の心は全く極度まで張りつめている。秋までには長篇小説少くとも三篇と、非常に進歩した形式の脚本【五幕。帝国文学の懸賞募集へ応ずるつもり。小説も「早稲田文学」と「大阪毎日」の懸賞へやって一つ世の中を驚かしてやろうと思う】を書くつもりである。」と書き、そして「暑中休暇になって原稿料が出来たら、どこか北方の淋しい海岸へ行って盛んに書こうと思うのだ」(同上)と記している。これは「面影」について言っているのだろうが、この「面影」は春陽堂へ送って戻され、さらにその春陽堂「新小説」主筆後藤宙外のもとへ送って戻され、小山内薫のもとへ送ったが、(以上「八十日間の記」)小山内薫は新詩社へまわした。(明39.9.25大信田金次郎宛書簡)そして紛失してしまったようである。

他に、啄木はこの時期の日記に小説の構想を多く記している。3月13日に1篇、8月27日に16篇、12月6日に3篇という有様である。このうち、8月27日構想の一篇をもって、11月19日~22日に「葬列」前半55枚をものし「明星」に送り十二月号に掲載されている。この作品については、友人である金田一京助、瀬川藻外、茅野蕭々、未見の友小島烏水より賞讃のことばや後篇を待つたよりを貰っている。啄木は〆切に遅れた「葬列」が12月3日着の明星の始めの方に掲載されているのに気をよくし、同7日に、「渋民日記」のはじめの方、渋民村帰住の3月4日から3月27日までを五十枚にまとめ、「林中日記」と題し、「明星」に送っている。その稿について啄木は「ああ、予の『我が懺悔』!!」(明39年12月7日)と記している。国木田独歩あたりを頭に置いたのであろう。ところが「明星」新年号に掲載されず、寛からは「〆葬列、も随分タシカナル人々の間に批難多し。批難をも反省の料とするは美德と存候。此春は詩作を御見せ被下度候」との手紙が来たことを、明治40年1月10日の日記に記している。寛は啄木が小説に熱心であるのに詩作を求めているのである。この時から、啄木は、寛や「明星」に対する傾倒の心を失って行ったようである。なおこれに先立つ1月6日の日記に押川春浪の英訳小説を読み、自分も自分の英訳小説を書こうと記している。その他、明治39年8月4日の大信田落花宛書簡、同16日の小笠原

迷宮宛書簡にも小説のことを記している。

その落花宛書簡では、原稿料をもって、借金（書簡では不義理の語を用いている）のうち五十円を返す意であることを述べているが、その書簡では「何故に小説を書き初め候ひしや？ かねてより心がけ居候ひし所なれば理由は種々あり。」と記している。原稿料を得たい心もあつたに違いないが、この時期に啄木は詩から散文への展開をとろうとしていたのであろうと私は考える。そしてそこに啄木のロマン主義時代が終ろうとしていることが見えるようである。

付 記 の 2

啄木が渋民尋常高等小学校の生徒のために作った唱歌二篇が筑摩版啄木全集第2巻に収められている。一は「校友歌」と題する作で、「渋民尋常高等小学校生徒の為に。丙午七月一日作歌」と傍記。もう一篇は「別れ」と題し「渋民小学校卒業式に歌へる」で「調『荒城の月』に同じ。」と傍記している。この「別れ」の歌が明治40年3月20日、卒業式でなく、卒業生送別会席上、高等科女生徒五人の合唱が堀田女教師のオルガン、啄木のヴァイオリンの伴奏でなされたことはその日の日記に記され、前節にこの日の詳しい日記をすべて引用しておいた。

「雲は天才である」中に見える「いわば校歌といったような性質の一歌詞」というのはさきにその一連を記しておいたが、自由、自主を主張した高らかな調子の作であったが、その「雲は天才である」を書きはじめた前々日の作であるこの「校友歌」は極めておだやかで特徴のない作である。もう一つの「別れ」の方も同様である。今、それぞれのはじめ二連を記してみよう。

校 友 歌

一

文の林の浅緑
樹影しづけきこの庭に
桂の花の露むすび
望みの星を仰ぎ見て
春また春といそしめば
心の枝も若芽する

二

芽ぐめる枝に水そそぎ
また培（つちか）ふや朝夕
父母のなさけを身にしめて
螢雪の苦をつみゆかば
智恵の木の実の味甘き
常世（とこよ）の苑も遠からじ。

別 　　れ

一

心は高し岩手山
 思ひは長し北上や
 ここ漁民の学舎（まなびや）に
 むつびし年の重なりて

二

梅こそ咲かね、風かほる
 弥生二十日（やよいはつか）の春の昼
 若き心の歌ごえに
 わかれのむしろ興（きょう）たけぬ

この二篇を見ていると、実際には、啄木は「雲は天才である」に見えるほど自分の主張を烈しくとなえなかったのではないかという気もしてくる。

小説が事実そのままでないことは当然であるが、啄木日記中にウソがあるのに気づいた。日記の明治39年の「8月中」の中で4日の日に啄木は委託金費消の嫌疑で沼宮内警察分署長から来いとの事で行ってみると、大信田落花との事であると聞き、「多少不快、すぐ落花へ宛てて手紙を出して詰って見た。」と書いている。その事件は「寺問題やら党派心やから、遂彼等は皮肉なる計画によって予を陥れんと企てたのだ。村の駐在巡査を買収して密かに捏造事件を密告せしめたのだ。」という事情で起ったもので、落花の訴えによるものではなかったことがのちに判明した。しかし、啄木が「詰って見た」という手紙は、啄木全集の書簡篇に収められている。長文の手紙であるのでその一部を引用してみよう。

まず、落花に対する不義理（借金）を償うために小説を書いたこと、その稿料で、とりあえず五十円を返そうと考えていること、今まで返せなかった事情等を記したのち、「兄よ、私は兄を怨むべき一の理由をも有せざらむ。然れども、もし兄にして、私を告発する前に私に一度御通知有之候ひしならば私はその小説を兄に示して以て兄の寛大を以て猶数日の猶予を乞ひ得たりしならむ。兄よ、兄よ、石川啄木が一生の死活は今なり。」と泣訴している。この日の時点では委託金費消は、落花の訴えで、取りしらべられることになったと啄木は考えていたのである。そして更に啄木は落花に泣訴している。「兄よ、私は金を得次第兄を訪問せむ。兄よ何卒男一人の生命御助け下されて、かの一件何卒何卒願下げの寛典に預からむことを伏して兄の御前に歎願す。兄よ。兄よ。兄

は私を救ひたまはざるか。一切を悔悟して今や漸く贖罪の日に至らむとするの時、かくの如きに至れるは抑々これ何のためぞ、私は天意の存する所を疑はざるをえず。あゝ兄よ。兄。願はくは石川啄木をして猶この世に生かしめよ。」この文言を見ると、啄木はどう見ても落花に哀願している。それを啄木は日記で、落花に「詰ってみた」と言っているのであって、この日記はどう考えても書簡の文面の趣旨とは大違いである。他人に見せない日記といえども、こういう体面に関する点ではウソを書いているのである。もっとも、「この事について落花に泣訴、哀願した」とも日記に書きにくいことはわかるが、「多少不快」「詰って見た」とはどうも態度が大きい。

そこで啄木の日記の信憑性のこととなるが、考え方や行動の実際について、体面を重んじて書いている面があるかも知れぬが、それ以外については信頼してよいのではあるまいかと私は考えている。日記にまで、考え方や行動についてのウソはあるまい。

終 り に

かなり長い間に一節ずつ書きためてきたため、読みかえしてみると、各節のつづきも不十分であるし、同じ引用をくりかえしているのに気づいた。いくらか、削ったりしたけれど、そうもいかない場合があって、やむを得なかった。御諒承いただきたい。(73.10.31)

注

- (1) 「今年の夏、ゴルキイ氏が北米の新聞記者に語ったところによると、カンというロシアの一地方の農民どもは、饑饉救助のために政府で与えた若干ずつの金を以て、パンを買わず衣をもとめず、皆こぞって銃と弾丸とを購(あがな)ったと言うではないか。銃と弾丸とは、説明するまでもない。彼等の奪われたる自由を取戻すべき武器であるのだ。口国の農民は実に「自由の民」である。現在ではなお野蛮な奴隸的な境遇にあるにしても、この烈火の如き自由の意気は、やがて一切の文明を吞吐し、淘汰すべき一大鎔鋳炉ではないか。人生の最大最強なる活力ではないか。」(「林中書」)

- (2) 第一節における、日本とロシアの比較、そして注1の部分などを参照すると、啄木は自由、自主の人間を育成しようと考えていると判断される。
- (3) 啄木が浜民村の小学校の代用教員を免職になって、函館へ行き、その地の小学校の教員になり、かつ、その地の文学誌「紅苜蓿」に加って、書いた小説に「漂泊」というのがある。その中で、函館の友人と海辺で語る場面があるが、当時女学校教師をしていた大島経男（この人を、啄木は尊敬していたらしく、その書簡では、よく……先生と記している）をモデルにしたらしい人物楠野や啄木自身をモデルとしているらしい後藤肇が出てくる。その文中、肇が幼時、白昼林檎をぬすんで見つけた話、夜ひそかに行き、うまくぬすんできたイトコの話から「今の社会は鼠賊の寄合で道徳とかいうものはその鼠賊どもが暗中の隠密(こつそり)主義を保持してゆく為のものだ」と言い「学校という学校は、皆鼠賊の養成所で、教育家は、好きな酒を飲むにもこつそりと飲む。これは僕の実見した話だが、ある女教師は『おかしなことがあっても人の前へ出た時は笑っちゃいけません。』と生徒に教えていた。」と言っている。また、女学校教師である楠野はこう言っている。「女学校と謂えや君、若い女に教える処だろう、若い女は年をとって、妻になり母になる。いわゆる家庭の女王になるんだろう。そこだ、君。僕ははじめに其処を考えたんだ。現時の社会は到底破壊しなければならぬ。破壊しなけりやならぬが、僕等一人や二人が、いかに声を大きくして叫んだとて、やはり駄目なんだね。それよりは、年の若い女というものは比較的感化しやすい、年若い女に教える女学校がすなわち僕等のまず第一に占領すべき城だと考えたね。若い女を改造するのだ。改造された女が妻となり母となる。家庭の女王となる。」ところが「生徒はどうかというと、情けないもんだよ君、白い蓮華の蕾のようなはずの14、15という少女(こども)でさへ早く世の中の風に染って、自己を偽ることを何とも思わんようになってる。」と語らせている。これは啄木が願っている「子供のまま」ということがくずれてゆくのを嘆いているのである。ここでも、子どもをそうするのは「教育」とともに「世の中」であるとしている点が認められるように思う。以上この項の引用はすべて「漂泊」（「紅苜蓿」第七冊明40.7.10刊）による。

- (4) 碓田のぼる氏は『石川啄木』（東邦出版社、昭和48.3刊）中で「これが啄木が生徒に歌わせた自作の詩である」（140P）と言われているが、その証はない。ただし、この詩が啄木の精神を詠じているので、彼の教育観を見る資料とすることはさしつかえないと思う。なお、本稿の末尾の「付記2」に記したように、「雲は天才である」を書いた時点で、生徒に歌わせたとは考えがたい。
- (5) この詩は「春月」（「明星」明39.5.午歳第5号所載）と、「春月は高士臥すなる大林の若芽する夜にさしそひにける」〔日記・明39.3.13〕と似た点がある。前者には「いのちの森」の語や「高士」の語が見える。そして、「あこがれ以後」中の「無題」（「小樽日報」明40.10.5.無署名）へ続いている。その詩は、古い思想、悪徳・迷信等と戦い、新しい世を作ろうの心を歌っている。
- (6) 本稿の末尾の「付記2」に一部分記しておいた。
- (7) 実は、この前文の末尾「健全なる民衆を育てることである。」のあとに「しかし、最高目的はどこまでも最高目的で、第二の目的はやはり第二の目的であることを忘れてはならぬ。」と書いているが、くりかえしであるので略しておいた。なお、啄木は支配をいつも「支配」と書いている。